

叙事詩の宗教哲学 —Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XX)¹—

茂木 秀 淳 社会科学教育講座

[238 章]²(D.247 章, 8951-8973, K.252 章)

ヴィヤーサは言った。

- (1) 根本原質の変異物³によって、知田者は覆われている⁴。変異物は、それ(知田者)を知らないが⁵、しかし知田者はそれら(変異物)を知る。(Cf.Hopkins[Great Epic] pp.29ff)
- (2) そしてそれ(知田者)は⁶、思考器官 (manas) を六番目とする感官によってこの世での行為を行う。あたかも御者がよく調御され力あるすぐれた馬によって(馬車を進める)かのように。(Cf.Kaṭha Up.3.3)
- (3) 感官よりも対象が上であり⁷、対象よりも思考器官が上である。統覚 (buddhi) は思考器官より上であり、大きなアートマンは⁸統覚より上である。(Cf.MBh.XII.267.15-16, Kaṭha Up.3.10, BhG.3.42, Hopkins[Great Epic] p.131,fn.1, Haas[1922] No.363, p.23)
- (4) 大きなもの (mahat) より未顕現のものが上であり、未顕現のものより不死のものが上である⁹。不死のものより上のものはない¹⁰。それこそが頂点であり、それこそが最高の帰趨である。(Cf.Kaṭha Up.3.11)
- (5) このように、アートマンは、あらゆる生き物の中に隠れているので¹¹(目に) 見えない。しかし、すぐれた微細な統覚 (buddhi) を通して、真理を見る者たちによって¹²見られる。(Cf.MBh.III.203.34, XII.203.33; Kaṭha Up.3.12, Hopkins[Great Epic] pp.39, 160,fn.2)

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学—『Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XIX)—』(『密教研究』第 205 号平成 12 年 12 月)に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いるものは以下のとおりである。

- Hopkins[Great epic]: E.W. Hopkins, *The Great Epic of India, Its Character and Origin*, 1901, Reprint Calcutta 1978.
- Hopkins[1910]: E.W.Hopkins, *Mythological Aspects of Trees and Mountains in the Great Epic*, JAOS, vol.30, pp.347-374, 1910.
- Haas[1922]: George C. O. Haas, *Recurrent and Parallel Passages in the Principal Upanishads and the Bhagavad-Gītā*, JAOS, vol.42 pp.1-43, 1922.
- Frauwallner[1925]-2: E. Frauwallner, *Untersuchungen zum Mokṣadharmā. Die sāmkyistichen Texte*, WZKM 32, pp.179-206, 1925.
- Buitenen[1956]: J.A.B. van Buitenen, *Studies in Sāṃkhya(I)*, JAOS 76, pp.153-157, 1956. (Studies in Indian Literature and Philosophy, Collected Articles of J.A.B.van Buitenen, ed by L.Rocher, pp.43-52, 1988.)
- Buitenen[1957]: J.A.B. van Buitenen, *Studies in Sāṃkhya(III)*, JAOS 76, pp.88-107, 1957. (Studies in Indian Literature and Philosophy, Collected Articles of J.A.B.van Buitenen, ed by L.Rocher, pp.75-110, 1988.)
- Edgerton[1965]: F.Edgerton, *The Beginnings of Indian Philosophy*, Liverpool, London, Prescott, 1965.
- 中村 [1998]: 中村了昭「マハーバーラタの哲学 解脱法品原典解明」(上) 平楽寺書店 1998.

²この章の第 12 詩節までは、Edgerton の英訳がある (Edgerton[1965] pp.276-277)。また、238-240 章とパラレルにある 187 章、D.285 章の各詩節の異同については、すでに Frauwallner が対照表を提示している。(Cf.E.Frauwallner[1925-1] pp.180-181)

³P.,K.: prakṛtes tu vikārā D. prakṛtyās tu vikārā

⁴P. pariśṛitāḥ D.,K.: adhiṣṭhitaḥ Ca. pariśnu[sru]taḥ, saṃsāranadyām pravāhitaḥ kṣetrajña が adhiṣṭhita と共に用いられている例は、Śāntiparvan では、XII.204.8, 228.10 にある。この語は SK における puruṣa の属性を指す用法を想起させる。

⁵P. te cainam na prajānanti D.,K.: na cainam te prajānanti Ca. pratijānanti, pratiśabdaḥ pratikūlye, [prātikūlye]na jānanti / antargatany artham / te cainam ete prakṛtā mahadahaṃkāradayaḥ pratikūlaṃ bodhayanti, ahitam eva hitatayā darśayanti /

⁶P. caīṣa D.,K.: caivam

⁷P. parā hy arthā D.,K.: pare hy arthā

⁸mahān ātmā Ca. attmā, aham āspadatvād ahaṃkāraḥ / tato mahān paraḥ iti samuccayo draṣṭavyaḥ /

⁹P.,D.: avyaktā parato 'mrtam K. avyaktā puruṣaḥ paraḥ (K. の方が SK 的)

¹⁰P.,D.: amṛtān na paraṃ kiṃcid K. puruṣān na paraṃ kiṃcid

¹¹gūḍho 'tmā MBh.III.203.34 は bhūtātman と読んでいる。しかしここでは、bhūtātman と読む伝承はない。

¹²P. tattvadarśibhiḥ D.,K.: sūkṣmadarśibhiḥ

- (6) その知恵によって¹³、思考器官を六番目にもつ感官と感官の対象を自己の内部に収め¹⁴、そして心配すべきことに多くの注意を払わず¹⁵、(cf.MBh.XII.242.5)
- (7) 思考器官を学問 (vidyā) によって完成し、瞑想によって停止させて¹⁶、至高の存在は¹⁷寂静となり、そして、不死の境地に至る。
- (8) しかし、あらゆる感官に支配され、記憶が動揺した人 (martya) は、自己を (感官に) 与えることによって¹⁸、死に至る。
- (9) しかし、あらゆる思念 (saṃkalpa) を捨て¹⁹、心 (citta) をサットヴァ (統覚の純粹状態) に住さしむべし²⁰。サットヴァに心を住さしめた後、それ故、(行者は) カーランジャラ山 (のごとく不動) となるであろう²¹。
- (10) 行者 (yati) は、心の清浄さによって、善悪を捨て、寂静の自己に住して、無限の安楽を²²得る。(Cf.MBh.III.203.35, XII.180.29; Mait.Up.6.20, Hopkins[Great Epic] p.42,fn.2, Haas[1922] No.666, p.37)
- (11) 寂静の特徴とは、あたかも、満足して²³安楽に眠るがごとくである。あるいは、灯火が、風なき時、燃えつつも揺るがぬかのごとくである。(Cf.MBh.VI.28.19, XII.203.36; Hopkins[Great Epic] p.41)
- (12) このように、夜の始まりと終りに、自己によってアートマンに集中し、サットヴァを食物として自己を清めた者は²⁴、自己においてアートマンを見る。(Cf.MBh.XII.180.28, XII.203.37)
- (13) 伝説になく²⁵伝承になく、自ら確信すべき²⁶ヴェーダの秘密の聖典がこの教えである、息子よ。
- (14) あらゆるダルマの教説における、そして真理の教説におけるこの財産は、一万の (ヴェーダの) 讃歌を²⁷攪拌した後抽出された甘露である。
- (15) 新鮮な酪 (バター) は乳から、火は木から引き出されるように、賢者の知識は、息子のために引き出される。息子よ、これはスナータカのための聖典として、語られるべき教えである (cf.Hopkins[Great Epic] p.114)。
- (16) この教えは、静かならざる者、抑制せざる者、苦行を行わない者、ヴェーダを知らぬ者、そして、(師に?) 依存する者には²⁸語ってはならない。
- (17) 悪意ある者、心曲がった者、教えに背く者、議論の書によって焼かれた者 (cf.Hopkins[Great Epic] p.91)、そして告げ口をする者 (piśunāya) に (語ってはならない)。
- (18) この秘密の教え (dharma) は、信頼する者に²⁹、信頼されるべき者に、静まった者に、苦行を行う

¹³medhayā Ca. medhayā tattvajñānasthairyeṇa /

¹⁴antarātmani saṃliīya Deussen: Einschiebend in das innere Selbst voll Weisheit die Sinne mit Manas als sechstem und die Sinnesobjekte Edgerton[1965]: Lurking in the inner self この章には精神原理をあらわす語として、すでに kṣetrajña, amṛtam, ātman が用いられているが、この詩節の antarātman はそれらと同義なのかどうかははっきりしない。saṃliīya の主語は次の詩節の Nominative の anīśvara などであり、antarātman は Locative で用いられている。「anīśvara が自分の中に」と考えておきたい。

¹⁵bahu cintyam acintayan Edgerton[1965]: not caring about nor manifold care Deussen: ohne sich um allerlei Sorgen zu kümmern

¹⁶P.,K.: dhyānoparamaṇam D. dhyānenoparamaṇam

¹⁷anīśvaraḥ Cf.MBh.XII.289.3, Hopkins[Great Epic] pp.105-106, Edgerton[1965] p.276, fn.2.

¹⁸ātmanah saṃpradānena N. ātmanah saṃpradānena kāmādibhyaḥ samarpaṇena / Deussen: mit seinem Ātman allen Sinnen unterworfen Edgerton[1965] も同様に理解しており、N. の注も同様の趣旨と考えられる。

¹⁹P.,K.: hitvā D. āhatya

²⁰sattve cittam samāveśya N. は buddhi に二種の状態を想定し、sattva を buddhi の微細な状態としている。Hopkins は、ここ及び第 5 詩節での sattva を buddhi の意味に解している (Hopkins[Great Epic] p.160,fn.2)。同様の解釈は、特にこの箇所への言及はないが、Buitenen[1957] p.99 (p.95) にも示されている。第 1 詩節以降の buddhi, manas, citta 相互の関係は、明らかではない点もあるが、sattva を buddhi との関連でとらえる上記の解釈に従う。

²¹kālaṃjaro bhavet N. kālaṃjalaparvatavad aprakampyo bhavet /

²²P. sukhām ānantyaṃ D.,K.: sukhām atyantam

²³P.,K.: tṛptaḥ D. svapne

²⁴P. sattvāhāraviśuddhātmā D.,K.: laghvāhāro viśuddhātmā Edgerton[1965] living on goodness (p.277.fn.1): That is, probably, 'fasting'.

²⁵anaitiḥyam Cf.Hopkins[Great Epic] p.51,fn.3.

²⁶ātmapratyayikaṃ Deussen: dieser den Ātman zum Bewußtsein bringende Lehrkanon Cf. 中村 [1998] p.592, 13 詩節注

²⁷P.,D.: daśe 'dam ṛksahasrāṇi K. dṛṣyate ṛksahasrāṇi Cv. (reading daśaitad ṛksahasrāṇi) daśa itaḥ yuktaḥ daśeti / Veda の数について Hopkins[Great Epic] pp.5-6 参照。

²⁸tathā naanugatāya ca Deussen: ein anhänglicher Schüler 中村 [1998]: 恭順でない (学生)

²⁹P. ślāghate D.,K.: śrāghine

者に、愛しき息子に、そして従順な弟子に³⁰語られるべし。他の者には決して語ってはならない。

- (19) もし人がこの財宝に満ちた大地を彼に与えたとしても、真理を知る者は、「これはそれよりも優れている」と考えるべし。(Cf.Chând.Up.3.11.6)
- (20) それよりも秘密なもの、それは、人を超えた大我 (adhyātma) である。偉大な聖仙によって見られ、そしてウパニシャッドに詠まれているそのものを、(次章で) 汝に語るであろう (cf.Hopkins[Great Epic] p.53)。汝はそれについて私に尋ねたのである³¹。

[239 章] (D.247 章, 8974-8998, K.253 章)

シュカは言った。

- (1) もう一度ここで詳しく大我 (adhyātma) について私に語るべし。大我とは何であり、そしてそれはどのようなものかを³²、尊者よ、最高の聖仙よ。(Cf.MBh.XII.187.1)

ヴィヤーサは言った。

- (2) この世で人 (puruṣa) の大我として知られている³³もの、息子よ (tāta)、それを汝に語るであろう³⁴。それについて以下の説明を聞くべし。(Cf.MBh.XII.187.2, MBh(D.).XII.285.1)
- (3) 地、水、火、風、そして虚空が³⁵存在物の大元素である。(両者は)海と波の如し³⁶。(Cf.MBh.XII.187.4ab, 5cd, MBh(D.).XII.285.3ab, 5cd)
- (4) あたかも亀が手足を伸ばして再び引っ込めるように、大きな元素はより新しい(小さな)ものへと³⁷変化する。(Cf.MBh.XII.21.3, 187.6, 239.17, MBh(D.).XII.285.6)
- (5) このように、この世の動くもの動かざるものの一切は、それ(大元素)からできているので、創造においても帰滅においても、同じ仕方で述べられる。
- (6) 大元素は五種のみである。存在物を創造する者 (bhūtakṛt) が、息子よ、すべての存在物に多様さを創造した。その(多様さの)中にそれ(大我?)を(人は今)見るのである³⁸。(Cf.MBh.XII.187.7, MBh(D.).XII.285.9)

シュカは言った。

- (7) (創造者が)身体の中に創造したもの(多様性?)はどのようにして観察されるのか。どうしてそれらは、あるものは感官として、あるものはグナとして、観察されるのか。

ヴィヤーサは言った。

³⁰śiṣyānugatāya anugataaya(「従順な」)は16詩節では、教えを伝えるべきでない者を指すのに用いられている。Ganguliは、前者を one that doth not humbly wait upon one's preceptor、後者を dutiful disciple と訳している一方、Deussenは、両方とも、anhänglicher Schüler と訳している。第16詩節d句の異訳には nānagatāyaがあるが、tathānanugatāyacaと読むべきか。

³¹この後に、D.,K.は以下の詩節を付加している。

yac ca te manasi vartate paraṃ yatra cāsti tava saṃśayaḥ kvacit /

śrūyatām ayam ahaṃ tavāgrataḥ putra kiṃ hi kathayāmi te punaḥ // (cf.Hopkins[Great Epic] p.323)

³²p. yathā cedam D.,K.: yathā veda

³³p.,K.: vidyate D. paṭhyate

³⁴p. saṃpravakṣyāmi D.,K.: vartayīṣyāmi

³⁵p. ākāśam eva ca D.,K.: ākāśa eva ca

³⁶sāgarasyormayo yathā Cn. bhūtānām jarāyujādīnām sāgarorminyāyena pratijīvaṃ bhūmyādayaḥ prthak kalpitāḥ santīty arthah /

³⁷yaviyaḥsu Cn. yaviyaḥsu svalpeṣu śarīrākāreṣu mahābhūteṣu sthitvā vikurvate, sṛṣṭilayākhyam vikāram janayanti / 亀の四肢の伸縮を、元素の多様な存在物への変化になぞらえているこの比喩は意味をなしているのか。パラレルの MBh.XII.187.6 で亀の四肢の比喩で表されているのは、元素による創造と元素への帰滅であり、239.17 では buddhi のよる感官の創造帰滅である。また、MBh.XII.21.3 では、欲望 (kāma) を抑えることとの関連で用いられている。

³⁸yasmin yad anupaśyati Deussen: je nachdem er diesen oder jenen Zweck im Auge hatte 中村[1998]: (というのは) 彼らの [行為の目的の] 相違を考慮に入れたのである。

- (8) それを汝にここでありのままに示すであろう³⁹。心専一に、真実を正しく聞くべし。それは次のようである(?)⁴⁰。
- (9) 声、耳、そしてもろもろの穴の三種は、虚空より生じた。呼吸、運動、そして接触、これらは風の三種の性質 (guṇa) である。(Cf.MBh.XII.187.8, MBh(D.).XII.285.10ab,12ab)
- (10) 色、目、そして燃焼(消化)は三種の火であると規定されている。味、舌、粘液 (sneha)、これらは水の三種の属性である。(Cf.MBh.XII.187.9, MBh(D.).XII.285.11ab,10cd)
- (11) 香り、鼻、そして身体、これらは地の三種の性質である⁴¹。以上で五種の元素からなる感官の集合は⁴²説明された。
- (12) 接触は風から、味は水から、色は火から(生じる)と言われている。声は虚空から生じ、香りは地の属性と伝えられている。
- (13) 思考器官、統覚、そして自性 (bhāva, 本性) の三種は、自らを母胎として生じた⁴³。これらは、もろもろの性質より上位と考えられているが⁴⁴、性質の上を通過することはない(? na guṇān ativartante)。
- (14) 人において感官は五種、六番目が思考器官と言われる。七番目が統覚、さらに八番目が知田者と言われる⁴⁵。(Cf.MBh.XII.187.11, MBh(D.).XII.285.15)
- (15) 目は見るためのみにあり、思考器官は疑問を起こす。統覚は決定のためにあり、知田者は証人である、と言われている。(Cf.MBh.XII.187.12, MBh(D.).XII.285.17, Gauḍapāda Bhāṣya on SK30, Frauwallner[1925-1] p.186)
- (16) ラジャス、タマス、サットヴァの三種(のグナ)は自ら生じたものである⁴⁶。これらはすべてのものに等しく(存在する)。(人は)このことを(元素の)諸性質の中に観察すべし⁴⁷。
- (17) 亀が手足を伸ばして引っ込めるように(cf.MBh.239.4 脚注)、統覚は、感官の集団を創造した後に、(再び)引っ込める。
- (18) (人が)足の裏の上、頭頂の下に⁴⁸見る行為において⁴⁹、(感官の中で)最上位の統覚は作用する。(Cf.MBh.XII.187.13ab, MBh(D.).XII.285.14)
- (19) 統覚は属性 (guṇa) を⁵⁰支配し (nenīyate)、また統覚こそが思考器官を六番目とするすべての感官を(支配する)。統覚がなければ、どうして属性が⁵¹(あろうか。)(Cf.MBh.XII.187.16, MBh(D.).XII.285.18cdef; Hopkins[Great Epic] pp.119ff.)

³⁹P. vartayiṣyāmi yathāvad darśanam D.,K.: vartayiṣyāmi yathāvad anupūrvaśaḥ

⁴⁰yathātattvaṃ yathā ca tat 'yathā ca tat' も「正しく」を強調する副詞か。

⁴¹K. はこの後に次の句を挿入している。

śrotraṃ tvakcaṣuṣī jihvā nāsikā caiva pañcamī /

⁴²P.,K.: indriyagrāmo D. indriyagrāmair

⁴³P. mano buddhiś ca bhāvaś ca traya ete "tmanonijāḥ D. mano buddhiḥ svabhāvaś ca traya ete svayonijāḥ K. mano buddhiḥ svabhāvaś ca traya ete manomayāḥ Cn. svayonijāḥ tattatsamśkārasacivāc cittād āvirbhūtāḥ /

⁴⁴P. paramā matāḥ D.,K.: paramā gatāḥ

⁴⁵K.,P.,K.: kṣetrajñāṃ punar aṣṭamam MBh(D.).XII.285.15 kṣetrajñāḥ punar aṣṭamam この詩節から第 19 詩節まで、P と D.,K. は順序が入れ替わっている。P.14=D.,K.17, P.15=D.,K.18, P.16=D.,K.19, P.17=D.,K.14, P.18=D.,K.15, P.19=D.,K.16

⁴⁶svayonijāḥ Cp. svayoniḥ prakṛtiḥ, tajjā ākāśādīgatasattvikāṇśebhya utpannā ity arthaḥ /

⁴⁷P. tad guṇeṣūpalakṣayet D.,K.: tān guṇān upalakṣayet この詩節は 187 章にパラレルがなく、ここでの guṇa は、元素の諸性質を指すのか、とサットヴァなどの三種のグナを指すのかはつきりしない。P. の詩節の順序に従えば、この章のここまでで guṇa と呼ばれているのは元素の諸性質であり、第 19 詩節でサットヴァなどを指す用法が現われる。従って、この詩節の guṇa は、元素の諸性質を意味していると解した。

⁴⁸ūrdhvaṃ pādatalayor avān mūrdhnaś ca Cp. ūrdhvaṃ pādatalayor mūrdhnaś cārvāg iti śarīram ucyate

⁴⁹P.,D.,K.: etasminn eva kṛtye D.(285.14) etasminn eva kṛtsnye

⁵⁰guṇān Ca. guṇān te viśayasamīpe nīyate indriyādbhir janyate / Cs. guṇān sattvādīn, nenīyate punaḥ punaḥ pravartate / Cv. guṇān vairāgyādiguṇān /

⁵¹kuto guṇāḥ Ca. kutah iti sārvaivibhaktikaḥ tasiḥ tasmai ity arthe / buddhiṃ vinā niṣprayojanatvāt /

- (20) その中で⁵²、何か自分の中で歓喜と結びついたものと知覚されるもの、解脱したかの如く清浄なものがあれば、それをサットヴァと知るべし。(Cf.MBh.XII.187.30, MBh(D.).XII.285.29)
- (21) しかし、身体あるいは心 (manas) において⁵³苦痛と結びついたもの生じるならば、それは常に身体をもつもの (dehin) を運び、活動的なラジャスであろう⁵⁴。
- (22) しかし、蒙昧と結びつき、明らかな対象をもたず、決定できず、認識できないことが生じた時は、それはタマスであると知るべし。(Cf.MBh.XII.187.32, MBh(D.).XII.285.31)
- (23) 喜び、歓喜、歓楽、平静さ、そして健康を本性とする心が⁵⁵、偶然にしろそうでないにしろ生じたならば、サットヴァ的属性 (guṇa) が作用している⁵⁶。(Cf.MBh.XII.187.33, 212.26, MBh(D.).12.285.25c-26c)
- (24) 自惚れ、虚言、食欲、蒙昧と嫉妬はラジャスの特徴であり、これらは、原因があろうとなかろうと⁵⁷生じる。(Cf.MBh.XII.187.34, MBh(D.).XII.285.26cd-27ab)
- (25) そして蒙昧、酩酊、怠惰、睡眠から目覚めないことが⁵⁸、何らかの形で生じたならば、それらはタマスの属性と認識すべし。(Cf.MBh.XII.187.35, MBh(D.).XII.285.28)

[240 章]⁵⁹(D.248 章、8999-9023, K.254 章)

ヴィヤーサは言った。

- (1) 思考器官 (manas) は (対象の?) 状態 (bhāva) を⁶⁰創造する⁶¹。統覚 (buddhi) は (対象を) 決定する。心は⁶²(対象の) 快不快を知る。行為へと駆り立てるものは⁶³(これらの) 三種である。
- (2) 感官よりも対象が上位であり、対象よりも思考器官が上位である。思考器官よりも統覚が上位であり、統覚よりもアートマンが上位であると考えられている。(Cf.MBh.XII.187.11, 238.3; Katha Up.3.10, Hopkins[Great Epic] p.131, fn.1, Edgerton[1965] p.278, fn.1)
- (3) (通常の) 人にとって、統覚がアートマンである。統覚はアートマンの本性からなる⁶⁴。統覚は、状態に変異する時⁶⁵、思考器官となる。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.159)
- (4) 感官の個々の状態によって、統覚は微細に⁶⁶変異する。聞く時に (統覚は) 耳となり、触れる時に接触と言われる。
- (5) 見る時⁶⁷、(統覚は) 目となり、味わう時、舌となる。嗅ぐ時、(統覚は) 鼻となる。(このように) 統覚はそれぞれに変異する。

⁵²tatra MBh.XII.187.30, MBh(D.).XII.285.29 とパラレル。187 章の場合、この前に三種の vedanā の説明があり、従って tatra は個々の vedanā を個別的に取り上げるといふように関連しているが、ここでは、前後との関連がない。

⁵³kāye manasi vā ここでの manas は、思考器官ではなくて、身体に対する一般的な意味での心を表す用法であろう。

⁵⁴P. rājāḥ pravartakam tat syāt satatam hāri dehinām D.,K.: pravṛtām rāja ity evaṃ tatra cāpy upalakṣayet D.,K. の読みの方がわかりやすく、従って P. に比べ、より改変されたものと考えられる。

⁵⁵svasthātmacittatā Cs. svāmyaṃ sarvatra sattayā vartamānatvam / svasthātmacittatā, akṣubhitāntaḥkaraṇatā /

⁵⁶P. vartate sāttviko guṇaḥ D.,K.: vartante sāttvikā guṇāḥ

⁵⁷hetvāhetutaḥ Cs. hetvāhetutaḥ dṛṣṭāhetor adṛṣṭāhetos ca /

⁵⁸P. tandrī nidrāprabodhitā D.,K.: nidrā tandrā prabodhitā

⁵⁹この章の vv.1-8, 16-22 には、Edgerton の英訳がある (Edgerton[1965] pp.278-279)。

⁶⁰bhāvaṃ N. bhāvaṃ padārthaṃ vividham / Ca. bhāvaṃ bhavitṛdharmam jñānādi / Deussen: die Existenz [der Außendinge] Edgerton[1965] the condition of existence (of matter) 中村[1998]: 心情 (=問題 padārthaṃ)

⁶¹P.,K.: prasṛjate D. visṛjate Cn. (visṛjate) vividham utpādayati /

⁶²hrdayaṃ N. hrdayam ahaṃkāraṃ /

⁶³P.,D.: karmacodanā K. karmavedanā

⁶⁴P. buddhir evātmano 'tmikā D. buddhir evātmanātmani K. buddhir evātmano gatiḥ Ca. ātmikā ātmīyā, tayā śeṣāṇāṃ vyāpāraṇāt /

⁶⁵yadā vikurute bhāvaṃ N. sā yadā bhāvaṃ ghaṭādīṃ vividhākāraṃ kurute /

⁶⁶P. vikriyate hy aṇu D. vikriyate hy ataḥ K. vikriyate 'sakṛt aṇu については、Buitenen[1956] p.156 (p.48) 参照。

⁶⁷P. paśyanti D.,K.: paśyati

- (6) これらが感官と言われる。不可見 (の統覚) がこれらを支配する⁶⁸。統覚は人 (puruṣa) の中にいる時、三種の状態において作用する。(Cf.MBh.XII.187.20c-21b, MBh(D.).285.21-22)
- (7) (統覚は) ある時は歓喜を得、ある時は悲しむ⁶⁹。ある時は、この世で (?)⁷⁰、快とも苦とも結びつかない。(Cf.MBh.XII.187.21c-22b, MBh(D.).12.285.22c-23b)
- (8) 状態という本質をもつ⁷¹この統覚は、これら三種 (の状態) を超える。川の王である海が波を伴って大きな岸を (越えるように)⁷²。(Cf.MBh.XII.187.23, 303.3, MBh(D.).XII.285.23c-24b, Hopkins[Great Epic] p.159, Buitenen[1956] p.154)
- (9) 何かを望むとき、それ (統覚) は思考器官となる。これら (感官) は (統覚によって) 個々に支配されている⁷³、と記憶すべし。感官こそ力が強く⁷⁴、完全に制御されなければならない⁷⁵。
- (10) (統覚、思考器官、感官の) すべては順序に従って (作用する?)。各々が (別々に作用すると?) 規定されてはいない⁷⁶。(状態に) 分化していない統覚は⁷⁷、思考器官においては状態として⁷⁸存在する。しかし活動しているラジャスはサットヴァにも従う (?)⁷⁹(Cf.MBh.XII.187.24, MBh(D.).XII.285.24cd-25ab)
- (11) (統覚の) 状態は、存在する限り、すべてこの三種において存在する。それらは、外的対象に従って (anvartāḥ) 作用する。輻が車の輪ぶちを (回す) ように。(Cf.MBh.XII.187.26ab)
- (12) 人は⁸⁰、統覚を最上とし、適切に活動したり、たまたま休止する感官によって、(対象を) 照明すべし⁸¹。
- (13) この世のものはそのような本性をもつ、と賢者は迷わない。(賢者は) 悲しまず喜ばず、常に嫉妬を離れている。(Cf.MBh.XII.187.47, MBh(D.).XII.285.39)
- (14) アートマンは⁸²、欲望を領域とし、悪しき行為を行い⁸³、よく保持されていない⁸⁴不完全な感官によって、見るができない。(Cf.MBh.XII.187.56ab)

⁶⁸P. adṛśyādhitīṣṭhati D.,K.: adṛśyo 'dhitīṣṭhati D.285.21 duṣṭeṣu duṣyati D.,K. のように男性単数に読むと、adṛśya の指すものは、puruṣa あるいはātman ということになる。MBh.XII.187.20 も adṛśyo と読んでいる。Edgerton[Great Epic]: the unseen (intellect) p.278,fn.3.

⁶⁹P. śocate D.,K.: śocati

⁷⁰kaḍācid iha Edgerton[1965]: here MBh.XII.187, (D.)285.22 は kaḍācid api として iha を用いない。

⁷¹bhāvātmikā Cp. bhāvātmikā, utpattisvabhāva; Cv. bhāvātmikā bhagavadbhaktyātmikā /

⁷²etān ativartate 川は indriya、川の王である海は buddhi、波は bhāva、大きな岸は、buddhi の bhāva と bhāva なき状態の境界であろう。buddhi には 3 種の bhāva として存在する場合と、bhāva に分化しない状態が想定されている、と考えられる。この比喩は、MBh.XII.187.23 にも見られ、そこでは etān nātivartate(「越えない」) となっており、Edgerton はその読みをここでも適用している (Edgerton[1965]: This (intellect) ... never gets beyond these three conditions)。Hopkins[Great Epic] も同様に理解しているが、Buitenen は、「越える」と解している。buddhi に二様態を認める以上、「越える」と理解すべきであろう。MBh(D.).285.22cd では、etān parivartate と、全く別に読んでいるのはこの問題を避けるためか。

⁷³P. adhiṣṭhānāni vai buddhyā D.,K.: adhiṣṭhānāni vai buddhyām Cn. adhiṣṭhānāni indriyagolakāni / Deussen: Die mit Intelligenz ausgestatteten Sinnesorgane

⁷⁴P. medhyāni Cn. medhyāni, medhā rūpādijñānaṃ, tatra hitāni / Cp. medhāyai prajñāyai hitāni /

⁷⁵vijetavyāni Ca. vijetavyāni, rāgānapekṣavṛttitayā /

⁷⁶P. yad yan nānuvidhīyate D.,K.: yad yadānuvidhīyate

⁷⁷avibhāgatā buddhir bhāve Deussen: die Buddhi in der Existenz [der Sinne und Aufsendige] zur Zerlegung kommt

⁷⁸bhāve manasi manasi の代わりに tamasi と読むテキストもある (Ds, T, G1,2, M5)。ef 句の rajas と sattva の語に引かれた改変であろう。

⁷⁹pravartamānaṃ tu rajah sattvam apy anuvartate この Pef 句の前との関連がはっきりしない。D. には Pef に当たる句 (「しかし」より後) はない (K. にはあるが、新たな付加を示唆する記号 (‘) がついていて)。sattvam api と読むテキストはここ (P.,K.) のみで、他のパラレル句は、tadbhāvena, tadbhāvam と読んでいて。このあたりは、buddhi-tribhāva と rajas-sattva-tamas との関連で、伝承に混乱が生じていると思われる。

⁸⁰P. naraḥ D.,K.: manah

⁸¹praddipārthaṃ naraḥ(D.,K.:manah) kuryād Cs. praddipārthaṃ, praddipamātraprayojanaṃ, kuryāt /

⁸²P. na hy ātmā D.,K.: na cātmā パラレルの 187.56 では、P. も na cātmā となっている。hi がはっきりしないが、強調の意味で解した。

⁸³P. pravartamānair anaye D. pravartamānair anaghair K. pravartamānair anayair

⁸⁴P. durdharair D. duṣkarair K. durdharṣair

- (15) しかし、それらの光線を思考器官によって正しく制御するとき、アートマンは輝き出る⁸⁵。あたかも瓶の中で灯火が輝くかのように⁸⁶。闇 (tamas) が除かれた時、存在物がすべて現れるかのよう⁸⁷(Cf.MBh.XII.187.44)
- (16) 水鳥は水中を動いても汚れないように⁸⁸、完成した英知をもつ人は、対象の中を動きつつも、罪によって (汚れることはない)。あらゆるものに執着のない人は、決して汚れることはない。(Cf.MBh.XII.187.46)
- (17) 以前に為した行為を捨て、常にアートマンに喜び、あらゆる生き物の本性となり (cf.E.H.Johnston, Early Sāṃkhya, p.49)、属性の道に⁸⁹執着はしない者にとって、(cf.MBh.XII.187.45)
- (18) アートマンはサットヴァを生み出すが⁹⁰、グナを (生み出すことはない)⁹¹。グナは⁹²アートマンを知らず、アートマンはあらゆる点でグナを知っている。(Cf.MBh.XII.187.43cd,40ab, MBh(D.).XII.285.36cd,35ab)
- (19) アートマンはグナの見者であり、そして、そのように (yathātatham) 創造した者である⁹³。微細なるサットヴァと知田者の違いをこのように知るべし。(Cf.MBh.XII.187.40cd,37ab, MBh(D.).XII.285.35cd,33ab)
- (20) 一方はグナを創造し、他方はグナを創造しない。両者は、本性として (prakṛtyā) 異なる存在であるが、いつも結合している。(Cf.MBh.XII.187.37cd,39ab, MBh(D.).XII.285.33cd,34ab)
- (21) この両者が結合しているのは、たとえば、魚と水は異なるが結合しているがごとくであり、またブヨといちじくの実も⁹⁴、(異なるが) 共に結合しているのと同様である。(Cf.MBh.XII.187.39cd,38ab, MBh(D.).285.34cd)
- (22) あるいは、ムンジャ草における茎は (ムンジャ草とは) 別でもあり、共にもある。それと同様にこの (サットヴァとアートマン) 両者は結合し、互いに依存 (pratiṣṭhītau) している。

[241 章]⁹⁵(D.249 章, 9024-9037, K.255 章)

ヴィヤーサは言った。

- (1) サットヴァはグナを⁹⁶創造する。知田者は、(創造の) 後に、支配者として変異したあらゆるグナに無関心のごとく存在する⁹⁷。(Cf.MBh.XII.187.42ab, MBh(D.).285.37ab)

⁸⁵P. prakāśate hy ātmā D.,K.: prakāśate 'syātmā

⁸⁶P. ghaṭe dīpa iva jvalan D.,K.: dīpadīptā yathākṛtiḥ

⁸⁷P.,D.: apagate K. uparate D.,K. はこのあとに次の句を挿入している。
prakāśaṃ bhavate sarvaṃ tathedaṃ upadhāryatām /

⁸⁸D.,K. はこの後に次の句を挿入している。

vimuktātmā tathā yogī guṇadoṣair na lipyate

⁸⁹P. guṇamārgeṣv D.,K.: guṇavargeṣv

⁹⁰P. prasavati D.,K.: prasarati

⁹¹guṇān vāpi kadācana Deussen: und niemals mehr in die [übrigen] Guṇas Edgerton[1965]: His self brings forth goodness, not ever the (other) strands. 両者とも「生み出すことはない」と否定的に解している。ここには、否定辞がないが、187.43cd はそのように読んでおり、コンテキストからも、その読みが妥当と思われるので、否定辞を補って解した。また、Deussen, Edgerton とも、sattva を 3guṇa の一つと理解し、ātman は「(他の)guṇa を」生み出さない、と解している。しかし、ここでの sattva は、3guṇa の一つではなくて、buddhi の別名あるいは様態と捉えられることはできないか。

⁹²guṇā(h) Cv. guṇāḥ apradhānabhūtā jīvāḥ /

⁹³P. sa sraṣṭā caiva D.,K.: ca parisraṣṭā

⁹⁴P. cāpi D.,K.: vāpi この比喩については、M.B.Emeneau, *The strangling figs in Sanskrit literature*, University California Publications in Classical Philology, vol.13, 1949, pp.345-346 参照。

⁹⁵この章には、Edgerton の英訳がある (Edgerton[1965] pp.280-281)。

⁹⁶P.,D.: tu guṇān K. triguṇān

⁹⁷P. anuṭiṣṭhati D.,K.: adhiṭiṣṭhati

- (2) これらのグナを創造するものはすべて (?sarvaṃ)⁹⁸本性 (svabhāva) と結合している。蜘蛛が⁹⁹糸を作るかのごとく、(サットヴァは) 糸のようにグナを創造する¹⁰⁰。(Cf.MBh.XII.187.48, MBh(D.).285.40)
- (3) 滅したものは消滅したのではない¹⁰¹、(ただ) 活動が認識されないのだ¹⁰²、とある人々は主張する。そして、他の人々は、(滅したものは) 消滅したのだ、と主張する。(Cf.MBh.XII.187.49ab,50ab, MBh(D.).285.41)
- (4) 両者を考慮して、考えた通りに決定すべし。このようにしてこそ、胎児は大きくなるであろう (?)¹⁰³。(Cf.MBh.XII.187.50cd)
- (5) 人は、無始無終の永遠性に達して¹⁰⁴、怒らず、喜ばず、常に嫉妬を離れて行為すべし。
- (6) このように統覚の配慮からなる¹⁰⁵硬い心の結び目 (hṛdaya-granthin) を超えて¹⁰⁶、悲しむことなく、疑問を断ち切って、安楽に住すべし。(Cf.MBh.XII.187.51, MBh(D.).XII.285.42; Kaṭha Up.6.15)
- (7) 無知な人が、岸から満水の川に落ちて溺れ苦しむ¹⁰⁷かのごとく、この世を知るべし。(Cf.MBh.XII.187.52, MBh(D.).XII.285.43)
- (8) しかし、賢者は苦しむことはない。真理を知る彼は、アートマンを獲得し、完全なアートマンの認識を獲得して、地上を行く。(Cf.MBh.XII.187.53, MBh(D.).XII.285.44)
- (9) このように認識した後、人は、生き物の (bhūta) 去来を徐々に正しく観察して¹⁰⁸、最高の寂靜を獲得する。(Cf.MBh.XII.187.54)
- (10) かくして、アートマンの認識と寂靜は、特にパラモンにとって、誕生による能力である。(それによって) そのすぐれた境地は獲得されるのである¹⁰⁹。
- (11) このように認識した後、覚者となるであろう¹¹⁰。覚者の特徴は他にあるか。このように認識して、賢者は、為すべきことを為して解脱する。(Cf.MBh.XII.187.57, MBh(D.).XII.285.32cd)
- (12) 無知な人にとってはきわめて大きな恐怖となるような¹¹¹大きな恐怖は賢者にはない。なぜならば、賢者の永遠なる境地よりすぐれた境地はだれにも存在しない故。(Cf.MBh.XII.187.58, MBh(D.).XII.285.45, Hopkins[Great Epic] p.346 (puṣpitāgrā))
- (13) 人は病んだ世界に¹¹²不満をもち、これこれのものを見ては嘆く。そこに、為されたことと為されないことの両者を知り、嘆くことなき善き人々を見よ。(Cf.MBh.XII.187.60, Hopkins[Great Epic] p.322 (rathoddhatā))

⁹⁸P.,D.: sarvaṃ K. sattvaṃ Edgerton[1965]: wholly joined with self-nature

⁹⁹ūrṇanābhīr Cn. abhinnaṇimittopādānāvasūcayāya ūrṇanābhīdṛṣṭāntaḥ /

¹⁰⁰P.,K.: sṛjate tantuvad guṇān D. sṛjate tad guṇāms tathā

¹⁰¹nivartante Cn. ete guṇās tattvajñānenādarśanaṃ gatāḥ santo na nivartante, ghaṭādivan na naśyanti, kiṃ tu rajjūragādivad bādha evātra pradhvaṃsapadārthaḥ / Cs. na nivartante, na punaḥ kṣetrājñāṃ badhnanti /

¹⁰²pravṛttir nopalabhyate Cn. nivṛttasya hi ghaṭādeḥ kapālādirūpeṇa pravṛttir labhyate, atra ghaṭo dhvasta iti / iha tu tādrīkpravṛtṭiyadarśanān niranvayanāśa eva guṇānām ity arthaḥ /

¹⁰³anenaiva vidhānena bhaved garbhaśayo mahān Ca. anenaivobhayapakṣasvīkāralakṣaṇena saṃśayena pravartamānas tattvajñānābhā-vād garbhaśayaḥ saṃsārī bāla iva mahān ... jñānāhīno bhavati / Cs. garbhaśayaḥ saṃsārī anena prakāreṇa mahān bhavet, paramātmāiva syāt / Edgerton[1965]: the occupant of wombs (one subject to rebirth) mahān の語については、J.A.B. van Buitenen, *The Large Ātman*, History of Religions, vol.4, Number 1 (Summer 1964) p.113.10-17 参照。

¹⁰⁴P. anādinidhanaṃ nityaṃ āsādyā D. anādinidhanaṃ yī ātmā taṃ buddhvā K. anādinidhanaṃ nityaṃ taṃ buddhvā

¹⁰⁵buddhicintāmayam Cn. buddhidharmās cintādayas tatpradhānam buddhicintāmayam / Cs. buddhicintāmayam saṃśayabahulam /

drdhaṃ tarkeṇa duśchedyam /

¹⁰⁶P.,K. atītya D. anityaṃ

¹⁰⁷P. tapyeyuḥ D.,K.: tāmyeyuḥ

¹⁰⁸P. samavekṣya śanaḥ samyag D.,K.: samavekṣya ca vaiśaymyam

¹⁰⁹paryāptam tat parāyaṇam Cs. paryāptam parāyaṇam, pūrṇopāyaḥ paraprāptāy ity arthaḥ /

¹¹⁰P.,K.: bhaved buddhaḥ D. bhaved chuddhaḥ

¹¹¹P. sumad bhayaṃ bhavet D.,K.: sumad bhayaṃ paratra

¹¹²lokaṃ āturam Cn. lokyate iti loka bhogyaṃ rūpādiḥ / tam āturaṃ doṣākrāntaṃ janaḥ asūyate doṣeṇa paśyati bhogavaikasyāt / Cv.

(reading lokamātur anu-) lokamātuḥ prakṛteḥ sakāśāt /

- (14) (彼は) 何にせよ意図なく行い、以前に為したことを捨て去り、この世で行為しつつも、彼にとって善きこと悪きことの両者を引き起こすことはない。(Cf.MBh.XII.187.59, MBh(D.).XII.285.46; Hopkins[Great Epic] p.322(rathoddhatā))

[242 章]¹¹³(D.250 章, 9038-9063, K.256 章)

シュカは言った。

- (1) この世でそれよりもすぐれたダルマは存在しないような諸々のダルマよりすぐれたダルマ、それを私に語るべし。

ヴィヤーサは言った。

- (2) 聖仙の讃えた¹¹⁴ 古来のダルマにして、すべてのダルマの中で最もすぐれたダルマを汝に語ろう。心を集中して聞くべし。
- (3) 暴れまわり (pramāthīni)、あらゆる方向に突進する感官を、父が自分の子供たちを抑えるように、統覚によって努力して制御し、
- (4) 思考器官と感官の集中する¹¹⁵ 最高の苦行、それはあらゆるダルマよりもすぐれ、最高のダルマとされている。
- (5) 思考器官を六番目とするそれらすべて (の感官) を、英知によって集めて (saṃdhāya)、心配すべきことに多くの注意を払わず、自己に満足したるがごとく座すべし。
- (6) (感官が) 対象から¹¹⁶ 停止し、(それぞれの) 住处 (veśman) に留まる時、汝は自己によって、最高の永遠なるアートマンを見るであろう。
- (7) 偉大なるアートマンをもつ賢明なるバラモンたちは、煙のない火の如き一切のアートマンである大きなアートマンを見る。(Cf.MBh.XII.232.19ab, 310.11; Hopkins[Great Epic] p.435 (No.255), Haas[1922] No.658, p.36)
- (8) 花と実をつけ、多くの枝をもつ大きな木が、どこに私の花が、どこに私の実が、というように自分を知らないのと同様に (cf.Hopkins[1910] p.350)、
- (15) (その川は) 輪廻の海に導き、子宮というパーターラ世界のために越え難く (?)¹¹⁷、自己の誕生によって生じ¹¹⁸、舌という渦をもち、近づき難い¹¹⁹。
- (16) (その川を) 英知を完成し、堅固なる賢者は越える。その川を越えたものは、完全に解脱し、浄化されたアートマンをもち¹²⁰、アートマンを知り、清浄となる。
- (17) 最高の認識を得て、汝はブラフマンとの同一に至るであろう¹²¹。(汝は) あらゆる汚れを完全に越え、心寂靜となり (prasannātmā)、汚れを離れ、

¹¹³この章には、Edgerton の英訳がある (Edgerton[1965] pp.282-284)。

¹¹⁴P.,K.: ṛṣisaṃstutam D. ṛṣibhiḥ kṛtam

¹¹⁵P. ca hy aikāgryam D.,K.: cāpy aikāgryam

¹¹⁶gocarebhyo N. gocarebhyo bāhyābhyantaraviṣayebhyaḥ /

¹¹⁷yonipātāladustarām Cn. yoniḥ vāsanā / Cs. yonīśabdena garbhapraveśo lakṣyate / Edgerton[1965]: it is hard to cross because of its subterranean cavern of (birth in) wombs

¹¹⁸P. ātmajanmodbhavām D.,K.: ātmakarmodbhavām

¹¹⁹jihvāvartāṃ durāsādām Edgerton[1965]: and is dangerous to approach because of its whirlpools of the tongue Deussen: dessen Strudel die Reden sind, dem nicht gut zu naher ist Edgerton はこの部分の意味は明らかでないとしつつも、Duessen の解釈を unconvincing としている。Cf.Edgerton[1965] p.283, fn.1.

¹²⁰P. vipūtātmā D. vidhātātmā K. vidhūtātmā

¹²¹P. brahmabhūyaṃ gamiṣyasi D. brahmabhūyān bhaviṣyasi K. brahmabhūyaṃ bhaviṣyasi

- (18) 山に立つ者が地上にいる生き物を見るかのように¹²²、怒らず喜ばず、悪意なき心をもつ¹²³であろう。そして、あらゆる生き物の生成消滅を見るであろう。
- (19) あらゆるダルマの中で¹²⁴最もすぐれたダルマを、目覚めたる真理を見る聖者たちは (munayo) は、このように考えたのである、ダルマを維持する者の中で最もすぐれた者よ。
- (20) 不動の¹²⁵アートマンのこの教義を知ったならば、息子よ、制御したる者のために、好意的な者のために、従順なる者のために説くべし。
- (21) このアートマンの知識は秘すべきものであり、すべての中で最大の秘密である。そのアートマンの直観 (の知識) を私は (汝に) 直接語った。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.114,fn.2)
- (22) それは¹²⁶、女でも男でもなく、また中性でもない (cf.Śvet. Up. 5.10ab)。ブラフマンは、苦もなく快もなく、過去現在未来を本質としている。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.118, 118,fn.1)
- (23) このように知るならば、男あるいは女も再生に至らないであろう¹²⁷。このように非 (再) 生 (abhava) の獲得のために¹²⁸、(この) 道は¹²⁹定められている。
- (24) このすべてはどのように考えられるか、そしてどのように考えられないか¹³⁰、そして (再生して?) 生じるものと生じないもの、(これらについて) 私は語った、息子よ。
- (25) このように (tat)、歓喜し、徳を備え、よき息子としての徳を備えた¹³¹、愛しき息子によって問われたならば、ここで言われたことを、幸福のために (汝の) 息子に語るべし。

[243 章] (D.251 章, 9064-9087, K.257 章)

ヴィヤーサは言った。

- (1) 香り、味を、あるいは安楽を好んではならない。そここの人のもつ飾りを得てはならない。尊敬 (mānam) も、名誉も、名声も望んではならない。それこそが見者たるバラモンの振舞い (pracāra) である¹³²。
- (2) (教えを) 聞かんと欲し、梵行を保ち、すべてのヴェーダを学ぶべし。(すなわち)、讃歌、祭文、韻律を (学ぶべし)。そうでなければ、彼は (真の) バラモンではない¹³³。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.3,fn.1)
- (3) (バラモンは) あらゆる生き物の親戚のごとくして¹³⁴、一切を知り、一切のヴェーダを知り、欲望をもたず、死ぬことはない¹³⁵。そうでなければ、彼は (真の) バラモンではない¹³⁶。

¹²² 「山の上から地上を見るかのように」という比喩に関しては、MBh.XII.198.93, XII.17.19; Dhammapada 28, YBh.1.47, Ahirbudhnyā Saṃhitā 15.71cd-72ab, Mahāvagga 1.5.7, Milinda 387 に見られることが、P. の Critical Apparatus に指摘されている。

¹²³ P., D.: ca naṇṣaṃsamatis K. ca aṇṣaṃsamatis (sandhi ignored)

¹²⁴ P. sarvadharmebhyo D., K.: sarvabhūtebhyo

¹²⁵ P. 'vyayino D., K.: vyāpino

¹²⁶ P. cedam D., K.: veda

¹²⁷ P. avāpnuyāt D., K.: avāpnute

¹²⁸ abhavapratipattiyartham Ca. abhavapratipattiyartham punarjanmanivṛttaye / Cn. abhavaḥ, anutpattir ātmā, tasya pratipattiyartham / Cs. abhavo mokṣaḥ, tatpratipattiyartham /

¹²⁹ P. vartma D., K.: dharmam

¹³⁰ P. na caitāni yathā tathā D., K.: tathaitāni yathātathā

¹³¹ P. satputraguṇānvitenā D., K.: satputra damānvitenā

¹³² pracāraḥ paśyato brāhmaṇasya Cn. pracāro vyavayārah / Cp. ācārah / Cs. anuṣṭhānam / Ca. paśyato viduṣaḥ /

¹³³ P. na tena na sa brāhmaṇaḥ D. yo veda na sa vai dvijaḥ K. vedavedāṅgapāragah P. 『ヴェーダを学ばなければ、バラモンとは言えない』、D. 『ヴェーダ (讃歌、祭文、韻律) を学んだだけでは、バラモンとは言えない』、K. 『ヴェーダとヴェーダ支分に専心する者は』、というように伝承に相違が生じている。

¹³⁴ P., D.: jñātvivat sarvabhūtānām K. jñānī yaḥ sarvabhūtānām

¹³⁵ nākāmo mriyate Ca. nākāmaḥ nānabhisamhitaphalakartā mriyate, mukta eva bhavatīty arthaḥ /

¹³⁶ P. na tena na ca brāhmaṇaḥ D. na tena na ca vai dvijaḥ K. not clear Deussen: und von ihm kann man nicht sagen, dass er kein wahrer Zwiegeborener sei.

- (4) 種々の望み (iṣṭi) を得、多くの報酬を伴う祭式を行おうとも、欲望によっては¹³⁷決してバラモンた
ることに到達しない。
- (5) 恐れさせることもなく恐れられることもない時、望むこともなく嫌うこともない時、ブラフマ
ンに達する。(Cf. MBh.XII.168.42, Śānti-parvan Appendix I. (No.4), lines 27-28, MBh(D.) XII.326.33,
Harivaṃśa I.30.41=MBh.XII.21.4)
- (6) 行為によって、心によって、言葉によって、あらゆる生き物を悪意を抱かない時、ブラフマンに達す
る。(Cf. MBh.XII.168.44, MBh(D.).XII.326.34, Śānti-parvan Appendix I. (No.4), lines 29-30, Harivaṃśa
I.30.40)
- (7) 欲望の束縛こそがこの世における唯一の¹³⁸束縛であり、他にはない。欲望の束縛を解いた者は実
にブラフマンと同一となる。(Cf.MBh.XII.231.18)
- (8) 黒雲から月が離れるが如く、欲望から解き放たれた者は、汚れなく (virajas)、(死の) 時を願いつ
つ¹³⁹、堅固さによって堅固に生きるのである。
- (9) 満ちても不動の海に (川の) 水が入るが如く (cf.MBh.VI.24.70ab)¹⁴⁰、欲望に望まれても¹⁴¹欲望を望
まない人 (dehin) は、世間から¹⁴²天界におもむく。
- (10) ヴェーダは真実と¹⁴³同置され (upaniṣat)、真実は¹⁴⁴制御と同置され、制御は布施と同置され、布施
は苦行と同置される¹⁴⁵。
- (11) 苦行は棄却 (tyāga) と同置され、棄却は安楽と同置され、安楽は天界と同置され、天界は寂靜 (śama)
と¹⁴⁶同置される。(Cf.MBh.XII.198.62, Hopkins[Great Epic] p.10 (Upanishads))
- (12) 悲しみと望みの (心の) 湿りを (?)¹⁴⁷、渴愛と共に焼き尽くして後¹⁴⁸。満足して (saṃtoṣāt)、寂靜を
特徴とする最上の善 (sattva) を汝は望むべし¹⁴⁹。
- (13) 悲しみなきこと、所有意識なきこと、寂靜、清らかな自己、自己の熟知¹⁵⁰、この (前詩節の満足を含
めた) 六種の¹⁵¹特徴をもつ者は、(この世に) 再び全てを備えた者として戻るであろう。
- (14) 善の特性を備えた六種の¹⁵²英知あるすぐれた賢者によって¹⁵³、死後¹⁵⁴アートマンを知る者は¹⁵⁵、
同様にここにあるそれら (六種の特性?) を知るであろう (?)¹⁵⁶。

¹³⁷P. abhidhyānāt D. avidhānāt K. avijñānāt Ca. abhidhyānāt phalābhidhyānāt / Cn. (reading avidhānāt) dayānaiṣkarmayayor
ananasaraṇāt / Cs. (reading avijñātā) paramātmajñānarahitah /

¹³⁸P.,D.: evaikaṃ K. evedaṃ

¹³⁹kālam ākāṣaṇ Cs. kālam śarīrapatanakālam /

¹⁴⁰ab 句の後に、D.,K. は以下の句を挿入している。

tadvat kāmā yaṃ praviśanti sarve sa śāntim āpnoti na kāmakāmaḥ / (cf.MBh.VI.24.70cd)

従って、D.,K. は、MBh.VI.24.70 に次の句 (P.cd 句) を付加していることになる。

¹⁴¹kāmkrānto Cn. kāmāḥ saṃkalpamātropanatāḥ kāntāḥ manoharāḥ /

¹⁴²P. lokāt D.,K.: kāmāt

¹⁴³P.,D.: satyaṃ K. dānam

¹⁴⁴P.,D. satyasyo- D. dānasyo-

¹⁴⁵MBh(D.).XII.299.13 に次のような平行句が見られる。

vedasyopaniṣat satyaṃ satyasyopaniṣad damaḥ /

dānasyopaniṣan mokṣa etat sarvānuśāsanam //

¹⁴⁶cchamaḥ Cn. śamaḥ nirguṇabrahmabhāvaḥ /

¹⁴⁷kledanaṃ śokamanasoḥ Cv. (reading kledane) kledane, anyonyamiśreṇe nistīrṇe satīti śeṣaḥ / Deussen: Die Benetzung des Kammers
und Wunshes

¹⁴⁸P.,D.: saṃtāpaṃ K. saṃtūpaṃ Cn. saṃtāpaṃ saṃtāpya kledanaṃ viklītākaraṇam / saṃtāpaṃ iti ṇamulantam /

¹⁴⁹P.,D.: icchasi K. icchati Cn. icchasi, iccheta — pañcamalakāro 'yam /

¹⁵⁰P. prasannātmātmavittamaḥ D. prasannātmā vimatsaraḥ K. praśāntātmā 'tmavic chuciḥ

¹⁵¹śadbhir Cn. śadbhiḥ, saṃtoṣasahitair viśokavādibhiḥ / P.,D. は五種のみ挙げられているのに対し、K. は六種の特徴を挙げている
(前注参照)。

¹⁵²śadbhiḥ Cn. śadbhiḥ pūrvoktaiḥ satyadamadānatapastyāgaśamākhyaiḥ /

¹⁵³P. adhikamantribhiḥ D.,K.: adhigataṃ tribhiḥ

¹⁵⁴pretya Cn. pretya jīvaty api dehe dehābhimānād utsthāya /

¹⁵⁵P.,D.: ye viduḥ pretya cātmānam K. ye viduḥ pratyagātmānam

¹⁵⁶P. ihaśhāms tāms tathā viduḥ D. ihaśhāṃ tam guṇam viduḥ K. ihaśhān amṛtān viduḥ ihaśhān の内容がはっきりしない。「(死後
ではなく) この世にある」か「賢者のそなえている」か。

- (15) 作られたものではなく、不滅であり¹⁵⁷、始原にして毀損なき¹⁵⁸大我について (adhyātmaṃ)、英知の完成した人は¹⁵⁹、揺るがない安樂を得る。
- (16) 心 (manas) を揺るがぬようにし、そして、あらゆる点で確立した後に得られる満足は、それ以外の仕方では得られないものである¹⁶⁰。
- (17) それによって¹⁶¹、人は食べなくとも満足し、それによって人は財産がなくとも満足し、それによって太っていないなくとも (?) 力を得るもの¹⁶²、それを知る者は、ヴェーダを知る者である。
- (18) アートマンの門をよく守り¹⁶³、種々吟味しつつ (門を) 閉じて、(瞑想のために?) 座る学識ある¹⁶⁴バラモンは、アートマンを喜ぶ者 (ātmarati) と言われる¹⁶⁵。
- (19) 高き真理に専心し、欲望を滅し、確固とした人には、安樂はあらゆる面から大きくなる (?) ¹⁶⁶。月の美しい形 (vapus)(が大きくなるか) のごとく。
- (20) 種々の¹⁶⁷存在物 (bhūta) や (その) 特性 (guṇa) を享受しないので¹⁶⁸、聖者 (muni) の苦は、安樂によって除かれる。光によって闇が除かれるかのごとく。
- (21) 行為を越え、特性の消滅 (さえ) も越え、対象に執着なきバラモンには、老と死が来ることはない。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.162)
- (22) 完全に解き放たれ、すべてに等しく (sama)、確固として存在する時、彼は、身体にありつつも、感官と感官の対象を超える。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.159, Haas[1922] No.812, p.42)
- (23) 究極の原因に達し、為すべきことを越え¹⁶⁹、高きよりも高きところに¹⁷⁰達した者には、再び輪廻 (āvartana) は存在しない。

(2001年5月25日 受理)

¹⁵⁷ asaṃhāryaṃ Ca. asaṃhāryam, avināśi / Cn. svabhāvasiddham /

¹⁵⁸ nirupaskṛtaṃ Ca. (reading anupaskṛtaṃ) anupaskṛtaṃ, vikārair upacayāadibhis tyaktaṃ / Cn. nirupaskṛtaṃ, guṇādhānam alāpa-karṣaṇātmakasaṃskāraṇam /

¹⁵⁹ P. adhyātmaṃ sukrataprajñāḥ D. adhyātmaṃ sukrtaṃ prāptaḥ K. adhyātmavit kṛtaprajñāḥ

¹⁶⁰ P. na śakyam ato 'nyathā D.,K.: na śakyā 'tmano 'nyathā

¹⁶¹ yena Cv. yena paramātmānā

¹⁶² asneho balaṃ dhatte Cv. asnehaḥ tailaghr̥tādisneharahito 'pi balaṃ dhatte

¹⁶³ P. saṃgopya hy ātmano dvārāṇy D. saṃguptāny ātmano dvārāṇy K. asaṅgo hy ātmano dvārāṇy

¹⁶⁴ śiṣṭaḥ Ca. śiṣṭas tadekaniṣṭhaḥ /

¹⁶⁵ ātmaratir ucyate ātmarati に関し、Deussen は、Chānd. Up.7.25.2 の参照を指示している (p.396) が、Muṇḍ. Up.3.1.4, Nṛsiṃhottaratāpini Up.6 にも見られる。これらの箇所では、ātmakṛdā と共に用いられている。また BhG.3.17 では ātmarati が単独で用いられている。

¹⁶⁶ anveti N. anveti vardhate Ganguli: his happiness is continuously enhanced like the lunar disc (in the lighted fortnight)

¹⁶⁷ P. saviśeṣāṇi D.,K.: aśiśeṣāṇi Cn. viśeṣāḥ sthūlapṛthivyādaya ekādaśendriyāṇi ca / aśiśeṣāḥ pañca tanmātrāṇi buddhiś ca / liṅgamātraṃ mahat tattvam, alīṅgaṃ pradhānam / tatra pūrvapūrvatyāgenottaram uttaram pratipadyamāno yogī guṇān api tyajati / saviśeṣāṇīti pāṭhe bhūtaśabdena pañcatanmātrāṇy eva svakāryasthūlabhūtasahitānīty arthaḥ / aśiśeṣāṇi bhūtāni という読みについては、Hopkins[Great Epic] p.173 参照。

¹⁶⁸ P. cābhajato D.,K.: ca jahato

¹⁶⁹ prāpya atikrāntasya kāryatām sandhi 不規則。Ca. kāryatām, upādhivaśāt janmasaṃbandham / Cn. kāryatām, avyaktām /

¹⁷⁰ P.,K.: parāt param D. param padam